

あいらの歴史と物語

発行責任者 始良歴史ボランティア協会
会長 竹之下 洲一
編集者 広報部 恒吉 一洋

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 0995(65)1553

歩き・み・ふれる歴史の道



島津義弘初陣の地

岩剣城跡登山

松下 澄行

義弘は天文4年(1535)島津家15代当主島津貴久の次男として薩摩国伊作城で誕生しました。

武将として育てられた義弘は、19歳の時、白かね(現在の白銀坂付近)に陣を敷いて、岩剣城の戦に臨んだといわれています。(初陣)

義弘はその後、木崎原合戦、耳川の戦い、文禄・慶長の役、関ヶ原の戦いなど、生涯において五十数回の戦いを経験したと伝えられています。義弘が戦国武将の名をとどろかせる第一歩となったのが、正にこの「岩剣城の戦い」です。

豊臣軍との戦いや関ヶ原の戦いなど負け戦もあった中で、戦死することもなく、加治木の地で85歳の長寿を全うできたのは、本当に幸運な人生だったと思います。

岩剣城は、平野部に突き出た標高約220mの険阻な岩山に築かれた奥行約400m×幅約100mの山城で、別名剣ノ平とも呼ばれています。

存続期間は、享禄2年(1529)から天文23年(1554)年までの25年間です(築城者渋谷氏)。

岩剣城は、蒲生方の支城で渋谷河内守の嫡子西侯武蔵守が城将として守っていました。天文23年の岩剣城の戦いは、島津貴久軍と蒲生軍との戦いですが、島津軍が直接岩剣城を攻めたのではなく、戦闘は平地でおこなわれました。

平成29年5月20日の「歩き・み・ふれる歴史の道」には市内外の多くの方々のご参加をいただきありがとうございました。五月晴れのもと、事故もなく無事に終了いたしました。

よろしくお願いたします

永山はるか (市社会教育課文化財係)

このたび、新規採用職員として文化財係に配属されました。

文化財に恵まれた始良市で働けることに喜びを感じると同時に、身の引き締まる思いがいたします。まだまだ分からない事ばかりで、ご迷惑をおかけすることも多いかと思いますが、一日でも早くお役に立てるよう精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いたします。



中世と近世の香りただよう入来院

恒見 勝則

入来院は、入来院氏の拠点であった中世の山城清色城を背に、その山裾に近世の地頭館(御仮屋)を置き、東を流れる樋脇川との平地部に位置します。麓は、戦国期清色城築城後に造られ、山城の袂や谷間に家臣を集住させ、特に樋脇川を天然の堀と見立て、その内側に武家屋敷を配置している点は、軍防を主とした戦国期の城下形式の代表例とみられます。



茅葺門

麓地区には、清色城跡・御仮屋跡・増田家住宅・三十三観音塔・茅葺門・赤城神社等の史跡があります。入来院麓の特性は、樋脇川沿岸の植生と清色城跡が一体となった歴史的景観、玉石垣と生垣のたたずまいなど、ゆったりとした雰囲気で自然と調和しているところです。



旧増田家住宅

旧入来院の歴史

佐土原 保子

平安時代の延暦14年(795)に租税(米など)を収納する院倉の名称として「入来院」の文字が現れ、後には地域名となりました。旧入来院・旧樋脇町の全部と旧川内市の楠本・中村・久住を加えた広大な地域です。

平安時代末には入来院頼宗が入来院に居城し、また別に伴氏も塔之原に居城しており、両者は長期間勢力を保っていました。

鎌倉時代の宝治元年(1247)相模国の渋谷光重が入来院地頭となり、長男を除き、二男を東郷に、三男を祁答院に、四男(定心)を入来院に、五男を高城に、それぞれ地頭として下向させました。後世、入来院の渋谷氏は名字も「入来院」に変えました。

戦国時代までは、守護職の島津氏とは協力したり、あるいは敵対したりの関係でしたが、永禄12年(1569)には島津氏の軍門に下りました。

それ以後は、入来院郷(旧入来院)の一私領主として明治維新に至りました。



入来院麓と清色城跡

花園寺跡

恒吉 一洋



花園寺跡は始良市鍋倉の島津義弘居館跡の一角にあります。

初代薩摩藩主家久は、寛永12年(1635)加治木島津屋形の敷地内に修験の持仏堂(花園寺)を建て、修験者となっていた五男の忠広に与え、修行の師である米良重真と共に藩の武運長久・領国安全等を祈願・勤行させました。

忠広は、翌13年(1636)には島津義弘の長女御屋地(千鶴)の養子となり、帖佐の旧島津義弘屋形に移り、花園寺も同地に移築されました。寛永17年(1640)になると、藩主となった兄光久の命により還俗して鹿児島に移りました。

跡地一帯の知行と花園寺は米良重真が拝領し、勤行・例祭・祭祀等を行うこととなり、それは代々子孫に受け継がれました。

平成28年(2017)2月3日、花園寺跡は公園として整備され開園しました。枯山水の庭園や建物柱跡などの遺構を生かし、トイレや駐車場

も完備した公園は、隣の義弘居館跡と共に観光の拠点としても期待されています。



武家門

豊州島津家墓地

迫村あけみ

総禅寺墓地は帖佐小学校後ろの山裾にあり、民間墓地より奥まった所が豊州島津家の墓所となっています。総禅寺は豊州島津家の菩提寺として文明12年(1480)頃に建立されました。

帖佐は鎌倉時代の頃に京都から下向した平山氏が治めていましたが、平山氏は享徳4年(1454)に島津本家10代島津忠国の弟島津季久に滅ぼされ、帖佐は島津氏に領有されることとなりました。季久が豊後守を名

乗っていたことにより、以後豊州島津家と呼ばれています。この墓地には、初代季久の墓の他に第6代朝久の墓、朝久の妻で島津義弘の長女である御屋地様の墓などが建てられています。豊州家は、朝久の嫡子第7代久賀から黒木(現薩摩川内市祁答院町黒木)に移り、黒木島津家として明治維新まで続きました。総禅寺墓地には、鹿児島



島津季久墓

の南林寺墓地から移された、豊州家10~16代当主及び各々の妻や家族の墓等も並んでいます。

西南戦争「招魂塔」と「従軍記念碑」

帖佐(鍋倉)の総禅寺墓地入り口にある。正面の招魂塔(明治12年建立)には、帖佐郷から出陣した61名の戦死者名が刻まれ、右側の従軍記念碑(明治15年建立)には、正面中央に勝海舟書「思舊開素懐」の文字が、右側面には帖佐郷からの従軍者名が刻まれている。戦後わずか1~5年の後にこのような碑が建立されたことに、地区民や遺族の深い悲しみが感じられる。

* 舊 = 旧



西郷隆盛の足跡を訪ねて

その1



吉田 茂子
2017年は、「西南の役」から140年を迎え、各地で西郷隆盛の逸話が語り継がれています。

そこで今回は始良市加治木地区においての西郷さんの足跡を探してみ

ることにしました。

江戸無血開城という大業を成し遂げた西郷は、新時代を生き抜くための人間形成を目的に、鹿児島に私学校を創設します。

しかし、新政府は私学校党の行動を警戒し、斉彬が保管していた銃や弾薬を密かに他に移そうとし、私学校党との争奪戦がおこります。

それを契機に、私学校党は政府に尋問のためと称し軍隊を編成、西郷と共に鹿児島を出発しました。途中、重富から船で加治木港に着き、森山安之助宅に一泊しました。森山安之助は、江戸後期に焼酎と黒砂糖で富を得た加治木の豪商で、かもだ通り付近に豪邸を構えていました。

翌日、西郷一行は雪の降りしきる中、龍門司坂を上り大門坂で一休みし、溝辺・横川を経由して熊本方面へ北上しました。（次号へ続く）

企画展「隅州刀と加治木の刀工」

宮内 伸一



加治木郷土館では、平成29年1月17日から

3月19日まで約2か月間、企画展「隅州刀と加治木の刀工」を開催しました。

加治木には、江戸時代後半（18世紀中頃から19世紀中頃まで）に10名ほどの刀工がいたといわれています。そのため加治木で生産された刀を「隅州刀」と呼ぶようになりました。今回、加治木郷土館では、所蔵の隅州刀を一堂に公開し、刀の生産地でもあった加治木の歴史の一端を紹介することにしました。

今回展示したのは、刀剣が7振り、拵（こしら）え（薩摩拵）5振りでしたが、刀について興味のある方々が多く、期間中900名を超える来館者がありました。県下各地から、わざわざ来館された方も多く、現在でも日本刀の愛好者の方々が多いことを実感しました。



加治木郷土館

平成29年度は、野田昇平氏等の尽力により郷土館が開設されて80周年を迎えます。これまでの加治木の歴史を振り返り「戦前、戦中、戦後の暮らし」についての企画展、また、加治木の三大行事「くも合戦・太鼓踊り・初午祭」等に関する展示も計画する予定です。今年度も、皆様方が歴史に興味を持ち、楽しんでいただけるよう工夫していきますので、ぜひ多数ご来館ください。

編集後記

平成29年4月に、始良歴史ボランティア協会に新しく2人の仲間が入会されました。ご両名は、もともと歴史に造詣の深い方で、「歴史ボランティアガイド養成講座」で1年間みっちり研修されました。

皆様方からのガイド要請を心よりお待ちしております。

連絡先 始良市歴史民俗資料館 0995 (65) 1553